



図195 壺の線刻画 上,人物部分 下,解
釈図 下は実物大

施され、朱で赤彩された祭祀色の強い壺である。その文様帯の中に一体の人物がある。

人物(図一九五)は、頭が嘴の長い鳥のように見え、左手を腰にあて、右手を頭上に上げている。腰をひねり、腰のベルトの下がスカート状に見え、左手を腰にあて、右手を頭上に上げて裳を着て、鳥に仮装した巫女と考えられている。土器は全体の三分の二程度しか残っていないため、作られた時代の推測が難しいが、厚く塗られた朱や線で模様を描く技法、一緒に出土した土器の様相などから一七〇〇年前ごろの土器と推定されている。裳をまとった人物の絵とし

ては、今のところ日本最古の可能性があり、古墳時代の人々がどのような服装をしていたのかを考える上で貴重な資料である。

線刻画の土器は平成十四年、「朱塗り線刻人物画土器」の名で豊栄市の文化財に指定され、新潟市の文化財に継承されている。